大正期　（その６）

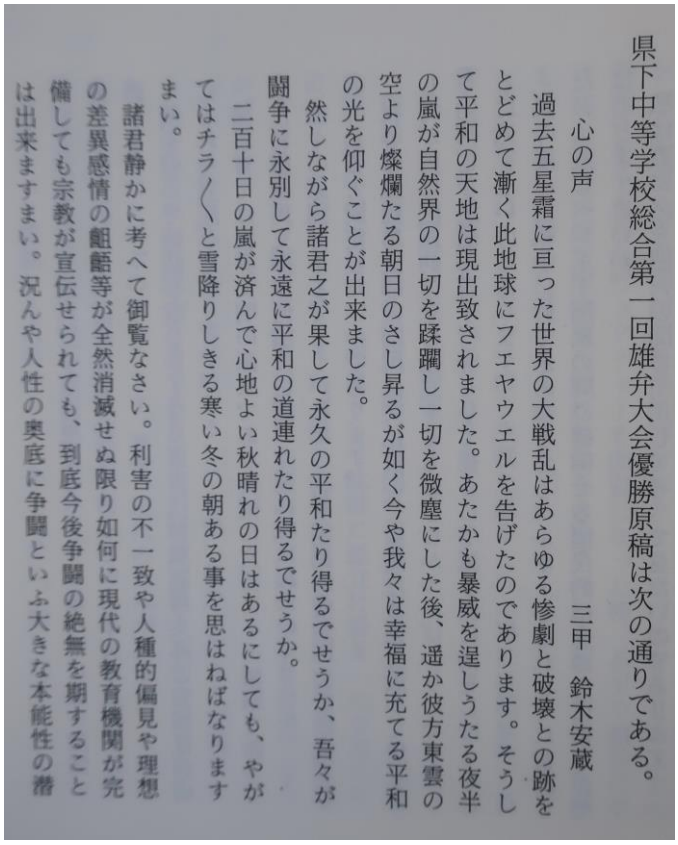
～「相中相高八十年」より～

６　弁論部の活躍

大正期には、頻繁に講演会が開かれている。現在と異なって、講演会が啓蒙の役割を果たしていたのであろうか。学者・軍人から卒業生に至るまでいろいろな人物による講演が行われている。

また、その影響によるのであろうか、校内における弁論も盛んであった。それは、講談部を中心に展開された。とくに、1919（大正８）年には、鈴木安蔵 (註1) が大活躍している。

かれは、11 月 30 日福島公会堂で行われた東北文芸協会主催県下学生弁論大会で優勝した。このとき、野崎辰雄 (註2) も五位に入賞している。さらに、かれは翌年 10 月９日二高主催東北弁論大会でも優勝、11 月 27 日東北文芸協会主催福島弁論大会に招待された。県下中等学校第一回雄弁大会優勝原稿は次の通りである。



県下中等学校総合第一回雄弁大会優勝原稿は次の通りである。

心の声　　三甲　鈴木安蔵

過去五星霜に亘った世界の大戦乱はあらゆる惨劇と破壊との跡をとどめて漸く此地球にフエヤウエルを告げたのであります。そうして平和の天地は現出致されました。あたかも暴威を逞しうたる夜半の嵐が自然界の一切を蹂躙し一切を微塵にした後、遥か彼方東雲の空より燦爛たる朝日のさし昇るが如く今や我々は幸福に充てる平和の光を仰ぐことが出来ました。

然しながら諸君之が果して永久の平和たり得るでせうか、吾々が闘争に永別して永遠に平和の道連れたり得るでせうか。

二百十日の嵐が済んで心地よい秋晴れの日はあるにしても、やがてはチラ〳〵と雪降りしきる寒い冬の朝ある事を思はねばなりますまい。

諸君静かに考へて御覧なさい。利害の不一致や人種的偏見や理想の差異感情の齟齬等が全然消滅せぬ限り如何に現代の教育機関が完備しても宗教が宣伝せられても、到底今後争闘の絶無を期することは出来ますまい。況んや人性の奥底に争闘といふ大きな本能性の潜

在して居る限り私は永遠に真の平和を見ざるべしと呼ぶに躊躇しないのであります。

葉巻ゆるやかに薫らしながら典雅なる趣味を物語り人類の愛を説く文明的教育を受けた紳士ですらも一旦戦闘となるや瞬時にして虎や狼に寸分も違はない猛悪残忍な心となって剣を握り銃を執り而して血まみれの争闘をも敢て辞さないのであります。

噫之が見苦しい人間本能性の暴露であります。さもしい人類野獣性の暴露であります。

国際連盟等に依ってあるひは将来の世界に於て武器の争闘の絶無を期する事は必ずしも空想ではないかも知れません。併しながらこの人間の野獣性はよしんば直接に流血を見ぬにしても更に婉曲なる方法により巧妙なる手段によって戦争以上の惨劇を演ずるに違いありますまい。

かく論じ来りまするとと我々はパンのために土のために永久に闘はなければならぬといふことは火を見るよりも明な事実であります。若し我々は此争闘を辞したならば我々は永遠に人生の墓場に埋没されなければなりますまい。永久に敗者の悲哀に泣かねばなりますまい。私は此処に於て闘争は永遠なりと叫びたいのであります。

斯の如く我今日彼を打たずんば彼明日我をうつべしといふ時代にあたって一国の民族に何等の定見なく只一時の平和に安逸の夢を食ってをるとしたならばどうでせう。其国民の将来こそ甚だ危まざるを得ないではありますまいか。

しからば果して帝国の現状如何。飜って戦後に於ける我国民の生活状態を見渡す時に悲しい哉私は其処に何等欽仰すべき一大信念を見出し能はないのであります。嘆はしい哉何等偉大なる希望の囁きを聞く事が出来ないのであります。

そして今や世は滔々として所謂成金を謳歌し物質的肉体的享楽を理想として帝国の使命を忘れ国民的自覚を欠くの状態ではありませんか。

吾々が過去幾千歳に亘る東西歴史のページを繙く時に幾多諸国の興亡が国民的信念の消長によるものであるといふ事実を見出すのであります。

例を引いて御話し致しますならば古代希臘羅馬支那の衰微は痛切にこれを立証してをります。

諸君嘗ては世界文明の源泉であり美術に文芸にその精華を誇って居た希臘羅馬支那は何故に亡国の非運に呪はれたのでせうか。

種々の原因もあるでせうが私はこれを国民的信念の欠乏に依るものであると断定したいのであります。

我等希臘羅馬支那の国民は文化にこそ燦然たる光を放って居りましたが内に国民的信念の確立するものがなかったばかりに今や空しく山河亡び跡訪ふ遊子行客をして徒らに弔滅の涙に袖をしぼらしむるに過ぎないのであります。

又今度の大戦争に於てあの微々たるベルギーがあれまでに奮闘したのは蓋しベルギー国民の間に磅礴せる国民的信念の力に依るのではありますまいか。

私は更に之を個人の間に引用して考へて見たいのであります。

古代希臘の大聖ソクラテスが彼独特の大雄弁を以て社会覚醒の警鐘を乱打し世の弊風を除かんとして、遂に群衆のために誤解せられ、死刑の宣告を受けた時「正義を信ずるものにとりて死果を又何する者ぞ、余は只正義に依りて真生命を完うせんのみ」と叫んで毒を仰ぎ従容として死に就いたのも又強猛なる英国軍の侵入によって彼フランス国の運命が只孤城オルレアンの存亡にかゝった時突如少女ジャンダークが花の身を銀鞍白馬に托し弾丸飛び交ふ戦場を馳駆し遂にフランスを滅亡の危急より救済したのも蓋し之皆ソクラテスやジャンダークの体内に漲る一大信念の力に外ならないのであります。又伊太利統一の美はしい歴史の上には快男子ガリバルヂーの名もあり